



大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和7(2025)年
11月号
通巻 663号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和7年11月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷 監製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



古代文字(甲骨文字)「舞」・「無」 堺 祥子(文・7頁)

昭和54年11月14日の対談の再編集版(当時、法主満68歳、竹内氏満54歳)

頭幽一如の世界(3)

対談：法主 矢追日聖×竹内敏晴

終戦を契機に

竹内 戦争には行かれたんですか。

法主 行かなかったです。

竹内 戦争が終わった時、おいくつだったんですか。

法主 満で33歳ぐらいでした。

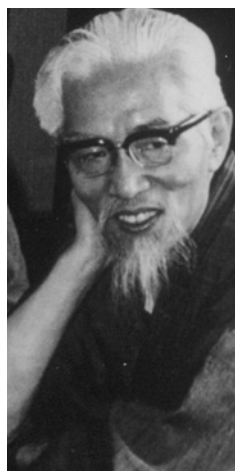
竹内 何にも読んでないので。戦災孤児を集めて、とか？

法主 いや集めたわけじゃないけど、頼って来る。こっちから募集したわけじゃない(笑)。

竹内 その頼って来たというのは、どういう事からですか。

法主 それは、終戦のあくる年あたりからね、大阪の街頭で社会福祉を論じとったんや。街頭布教やわな。終戦の直後で皆、動揺しとったから、戦後の日本の社会の一つの方向は、皆が何とか助けおうて皆が暮らしていける社会にするいう事やないか、とかね。信者を作る目的やなしに、政治とかも無関係で、皆を精神的に安定させるような内容の話を、日曜毎に、あっち行きこっち行き、辻説法。それを聞いて頼って来る人がおったんやわね。

その時はここに裸一貫で入って、普段は百姓してましてね。住まいも埋めたてた所へ萱で屋根葺いたような掘っ立て小屋やし、乞食生活を私自身がやってるんやと、それでも良かったらついてきたらええやないかということで。言うてみたらその当時の社会からこぼれてる人です

法主 矢追日聖
(60歳代後半)

わね。孤児もおれば、母子で路頭に迷ってるような人もおればね。まあいろんな事情がありますよ。街頭で私が喋って、終わった時に出てきて身上相談みたいになってな。だから行く所無いという者には、一緒に暮らそうやないかいってね、まあ頼って来る人を連れて帰ったんですよ。割合に軽犯罪の前科者が多かったんですよ。出て来ても社会で受け入れてくれへんし、飯は食わんならんし。竹内 社会福祉という、それを説かれるきつかけ……それは前からお考えになっていたわけですか。

法主 それは戦争前からずっと持つとったですな。竹内 そういう仕事をずっとやっておられて、ご自分の感じはどうですか。

法主 そうですね、私は、だいたい今の社会がいやなんです。結局、宗教の世界が一番良いのやけれども、私の場合には、さっき言っておった肉体の持たない人間、まあ靈魂というか霊界の人というか、そういうものと割合い若い時から交流があるんです。そんなんが、私にいろいろ言うて来る。

将来に対してお前はどうせないかん、こうせないかん。それに対して私はしょっちゅう抵抗する、反発するんですよ。はっきり言われたのは、16か17位の時ですね。私の人生は、宗教で行けと言ってます。初めから決定的にですよ。行くべき

運命に生まれていると私に言うんです。それに対してまた抵抗したんですよ。そんなもんおかしいと思うてね。

けれども今から考えてみたら、その時の宗教観ですね、それは宗教やなしに宗教団体を見ていやになっていったと思うんです。けど本来の宗教は、団体と違いますからね。個人個人の持つところものが宗教なんやから、何々教とか何々宗とかね、そういう団体の中に宗教は無いんです。けど私にしてみたら、坊さんや神主さんやおがみ屋さんや、ああいう世界が宗教やと思とったから、ものすごく抵抗しました。その抵抗するのが逆に本質を知る結果になったと思うんですね。

私が勉強したのは、これまた正反對でおかしいんですよ。唯物論の考古学専門だったんですよ。太学出るまで考古学やつとった。これはまた阿呆ほど唯物論。徹底した唯物論なんですからね、考古学というのは。そっちの方へ行かしよるのがね、またおかしいんですよ。

考古学では、古代の文化は分かるけれども歴史事実は分からんです。例えば一つの遺物が出てきた、と。これは、誰々のものと違うかとか考えたらもう考古学じゃないんです。だから私は、頭はそういう徹底した唯物論で働くところがあるんです。

それと私が考古学をやらされたというのにもう一つの根源が分かったのはね、古代社会の実情というのを、遺物、遺跡を通して見ることができたわね。遺跡と、出てくる遺物から推して、そこは想像ですけど、古代の人の現実の生活とか社会組織とかはどうなっておったか、と。例えば、一つの遺跡の発掘した所から土器、石器、魚の骨やとか馬の歯やとか植物の種やとかいろんなもの出てきます。そんなものから推していくと、大体、

生活様式とかその当時の社会のしくみとかの生活状態が分かってくるんですね。そういう事を私に勉強させる意味で、そっちへ走らせたんじゃないかな、と。私の本心がですよ。

そして社会が現在まで流れてきておる歴史を見た時に、やっぱり農耕中心の、神祭り中心であった弥生時代のしくみを見た時に、一番、私の気持ちが合うんですね。

竹内 ああそうですか。なるほどね。

法主 あの当時の社会であれば、祭主がいます。神祭りする人。集落のどこか良い所に神祭りする場がこしらえてあります。

その時代は、皆が同じように飯食ってるんやけどもね、人間には個人差というのがありますわね。魚を上手につかまえるやつもおれば、弓の上手な者もおる。また不器用なやつも、どんな人間もおるけれども。いわゆる世帯一つと言うかね、その集落一つ一つが家庭というような組織になっておって、その中で一番偉いというような人は誰もおらへん。

けど神仕える特殊な人もおるわけ。これは偉いんじゃないかって、トランスの役目してるんですね。神さんと皆の、まあ伝達係です。それは後の人の言葉で言うのと、「すめらみこと」という言葉になるんですけど、統べて治めていくお役目を持つている人だと言うんであって、権力者でもないし偉い人でもないし。普通の一家族ですからね。農耕とか狩猟とか、皆で共同作業やって、その中には身体障害者もおりの知的障害者もおったと思いますよ。想像してね。けどそれは、皆で育てたり一緒に生活しておると。今から言えば原始社会だけれど、まあ弥生式の社会はかなり形ができておったね。水田もできてたし、銅鐸のような立派な青銅器もあるし。



竹内敏晴 氏
(56歳頃) 撮影・安海関二
(『セクション 竹内敏晴の
「からだと思想」』
〈藤原書店〉による)

結局、終戦が動機だったんですよ。国の流れと

原始生活の発

私はそういう社会が一番好きなんです。で、唯物論ばかりやってんけど、反面にはそんなものがずーっと浸透してきてるんですね。けど戦争中は、お上の御用次第だから何言われたつてしょうがない。窮屈やけれど、法治国でしょう。法ではくくられてるわ、そこへ金でくくられるわ、人間一人一人切り離したものの、皆、持ってるしね。弥生式時代の社会と正反対の社会条件ですわね。というて逃げ出すわけにはいかないし、自殺すれば具合悪いし、生きていくとすれば社会のその時の流れに沿っていかなきゃならないし。

あれは分からんけれど、まあ神祭りに使ったもんだと思います。銅鐸と今は言ってるけれど、私は「ふるのみたま」だと思っんです。これの音は、神さんの声なんです。銅鐸は、中に舌がついていて、音が出る銅の器やからね。石器時代に銅器というのは非常に貴重な物やったと思います。あの音が人間と神さんと交流する響きです。今でも仏教の方ではチンカンとやってますわな。だから銅鐸というのは神さんのお祭りに使った「ふるのみたま」だと思っんです。今、それは刀と考えてますけど。石上神社の御神体になってます。

一緒に自分の人生もいっぺん、ここでやり直さなきゃいかん時が来たんだと。ちょうど33か34の時です。

自分の家としての先祖さんからの流れもありまじすね。私が戸主で、嫁さんと子供とかおりまして。私が、その同じ座におったらね、世の中が終戦になろうが何しようが日本人の気持ちというのはそう変わるものでないですよ。今の日本の社会を見たって徳川時代の心そのままですよ。内閣の偉いさんでも將軍さんみたいな気でおるんやから。形は議会政治とかになっとるけれど、自分の多い人が自分の意見を通しますからね。徳川の將軍さんと一緒です。だから、日本人はそんなもの持っとるから、自分自身にもやはりそんなもの持っとるはずやと。社会は戦争で負けて変わっていったとしても、私が今迄の同じ家の中で同じ状態でおったら、自分の人間の改革は、自分自身が不可能やと、周囲からもさせへん、と。

それで、家をもう全部放棄して、嫁さんと子供と茶碗と箸とを持って、山の中に入ってしまった。家の跡は弟に全部譲って。自分が、心を決意すれば、形も決意せなあかんからね。全部放棄してここへ入ってしめて、そこで私がここで死んだら得心やと思ってね。どれだけ食うもんで困ったかて、どんな事あったかて、ここで栄養失調で死んだら、自分自身の心の中は豊かで死んでいくのだから、私自身の救いとしてここへ来たわけです。

そこでもって、いろんな頼って来る人と一緒に同居する、飯は食わさんなんですよ、これはしんどかったわ。一生のうちで一番しんどかった、飯食うということが(笑)。金はあらへんでしょう。そこへもって、23、4人が小学校へ行っつてんのやからね。学校へ行けば費用がいりますわ。畑いらつてるだけで、特定の収入は無いし、有る物を金

に換えないけませんもの。闇で売りにも行つたし。竹内 その頃の子供さん達、今、どうしてらつしやるんですか。

法主 案外、今、皆安定してますね、外へ行つて。親子で来ているような子は、わずか残ってますがね。

純然たる孤児とかは、昭和30年頃までに皆、何か片付きました。子供を死なせて子供がおらんというような家庭もできてし、14、5になれば終戦後店開いたような人がくれへんかとか言うて来るし、ここに子供が沢山おるといって訪ねて来たり、割合、片付いてきました。昭和25、6年位まででしたかね、子供が多かったのは。

竹内 私は敗戦の頃は20歳だったんです。私の場合は、何にも分からない、ガラツとひっくり返ったでもんね。そこから始まった。私の友人で施設に入つて、大学へ行つたのを捨てちゃって、今、北海道で、家庭学校の校長をやっている人がいるんです。クリスチャンで。で、ちょっと伺ってみました。

法主 で、山やから勿論、電気も水道も無いし、ほんまの弥生時代のような原始生活。それが私の人生の一番良いところでしょうな。形では一番みすばらしいし、世間からも同情してもらつて。北海道へ行つてのやつたら知りませんが、ここは私の所有地やったし、すぐ近くが実家でしょう。親の方が同情されてる。あそこの息子さん、戦争負けて頭おかしいなつたん違うか、て(笑)。

竹内

なるほどな、弥生時代か……。法主 そうなんです。あの当時は、今言うような権力者はおらん社会です。けど皆から一番信用されとつた中心の人物は、その集落にきつとおつたはず。それを「すめらみこと」と言う。選挙してそんな人作るんじゃないに、いわゆる生ま

れながらの霊的感応と言うのか、また皆から信頼されるような素質を持つてるとかね、そんな人が中心になっておったんです。

母親のいっ

竹内 私の実の母じゃないんですけれど、竹内の母は、死んだ人によく話をするんです。それで何かいろいろ頼まれ事があったり。私自身はそういう傾向は無いんですが、身近にそういうことはあったわけです。

法主 郷里はどちらですか。

竹内 母の郷里は富山です。まあ古い家で、本家の方には古墳があるそうですけどね。私は、母一人の所へ養子に行ったわけです。さっき柔の話をしましたが、あれは実家の親父の系統で。

法主 きょうだいは何人ほど？

竹内 1人、5つの時に疫痢で亡くなった妹がおりまして、腹違いが1人おりますけれど、それを含めないと、6人ですか。7人かな(笑)。

法主 あなたの家の筋も、何かしらそういう筋やと、思ってる。さっきからじっと見ておって。

あなたは、自分で減多に感じてへんやろけどね、古い先祖さんいつも付いて回っとなねん。一緒に付いて来てはる(笑)。それがね、かなり厳しい指導してはるはずで。で、さっきからいろんな事聞きましたけどね、結果は減多に悪くないです。何かの教育のための現象としてね、現代社会の常識からみたら案外不幸な状態になる場合が多いですよ。皆、型が決まってますねん。大体、私はあなたの筋に靈感とか何かある人があるやろなあと、さっきから思うてたんやけどね。

竹内 母とは血はつながってないんですけれど、それがある因縁がありまして、私は長男だったん

ですが、養子になったわけです。

法主 やっぱそういう宿命と言うのか何かあるんですね。大体竹ノ内という姓は古いですよのね。

竹内 竹内は母の父親の血筋ですね。母の母親の方の血筋は、蓮如上人の系統の古いお寺です。

私も実は高等学校は理科で、大学は歴史をやったんですけれど、唯物論でマルクス主義を多少は勉強した(笑)。霊とかいうのも自分で分かるとういうのやないけれども、しかしそういうものが無いとは言わない、あるとも言わない。ただ自分が自分の思慮以外のものに関心を持たされているという事だけは分かる、という……。

法主 そうでしょうね。まあ訳の分からんことやけど、何か精神的な方面に行くような宿命をお互いに持っているんですね、家そのものが。

竹内 そういう風には思いますね。母親が今、人の相談事を受けて、その人にどういう霊が、今、関係しているのか、そういう事を見てあげるという事をやつとる、という事です。僕が一緒にいる時はそれやらんかったけど(笑)。

実を言うと母は脊髄カリエスで今まで生きているのが変なくらいで、実際私の目の前で何べんも自覚的に言う「と死んだ」という感じの事があるんですね。で、生き返って来る。そういう状態の時に

一番、死者との交流とか、予見ができるらしい。

その当時は、人から頼まれても、自分は普通の生活は一番住みにくい、それから離れた時に一番住み良くなる、と。だから普通の社会生活をしている人に自分が助言する事は良い事になるとは限らないかもしれない、だから言わんと済ましてたんです。知らんまに始まった(笑)。どれだけ役に立っているのか世を惑わしているのか分からな

いけど(笑)。

法主 でもまあそれは良い事やと思いますよ。家

によつては不思議な家がありますからねえ。

竹内 今までこういう話、人にした事が無いんです。今日、初めて(笑)。

法主 普通の人には通じないですよ。

竹内 僕が養子になった頃、世田谷に家がありまして、母が寝たきりですから、付き添いの人に、あと1時間したら学校から帰って来るから御飯炊いときなつて。どうして分かるんですかと言うと、僕の足音がするつて。僕が向こうを出た時にこっちから分かるわけです。

法主 それは分かるんですよ。それもまた人によつて違うんでね。将来の事よう分かる人とか先の事は分からんけど過去の事が分かる人や、いろんな種類があるんです。

竹内 ご先祖様が一緒に来ておるそうで。よろしく願います、という感じやな、もう(笑)。

杉本 競輪、競馬でも分かつたらええんやけどなあ。(笑)。

法主 競馬でも宝くじでも分かる言う人がようテレビでも出てるけど、あんなもん当たたら不思議やで。欲のついて回る仕事やからね。当たったところがムダなことやから。本当にまじめな人であれば、そんなん出てきやしません。

私も昔、例えば地震でも雷でも前もって知らせてくれたら、ある程度避難できる人もあるんやろうかなと思ったりしたことありましたけど、私の場合、また全然違いますねん。現実起こるような事、前もって言う必要ないと言うんですわ。時間きたらその時分かる言うんです。仮にそれが分かつて事実と間違いないかつたとしても、現実起こつて来るまでの間、世間の人間を動揺さすと言うんです。それは社会的に大きな害やと。それからそういうような予言は、一切あかんと、私に付いて来ている相手はそう言いますねん。(続く)

じんづうりきによぜ

「神通力如是」の真意をさぐる

第三十九回

大倭教の源流にさかのぼって

今回の神語りの中で、法主と大國主命（饒速日命）や奇稲田姫命や素戔鳴命とのかかわりをめぐって重大な発言がなされています。そのことをより深く理解するために、平成6年1月23日の月次祭の法話を文章化したものがあるので、関連部分を註釈の中で引用することにしました。

原文

（昭和16年11月28日の続き）

同日、午後八時半

倭姫

「朝ボラケ、松ヶ枝ニ明鳥一羽トマリケル。カアト一声高ク鳴キ、我皇孫ノ御齡、寿ギ奉ルゾ芽出度ケル。其時天津皇祖、雲ワケ出デテサシ昇リ光ヲ四方ニ耀シ、イト芽出度キ事カナ、是レ芽出度キモノ兆ナリ。」

大内山、池ノミギハニ丹頂ノ鶴トビカヒ、皇祖ノ御言ノ葉ヲ我が大君ニ告ゲ玉フ。

大海原ノ磐ノ間我レ昇リ、千波萬波ニ光ヲウツス。黄金波押寄セテ、我日本ノ瑞兆ヲ示スモノニテアルゾカシ。題目「実相。海邊向ふに島二つあり、其間よ

り天津皇祖姿を出し玉ふ。千波萬波に其御光り輝き雲一面あかね色也。いと美しき事なり。波は黄金をまきしやうキラ／＼と光るなり。

「吾ハ、七面大天女。」

無地名太郎重成、ヨクゾ参ラレタ。先程汝ガ妻梅菊ニ申シ聞カセオキシ事シカト承ハリシカ、汝吾子日蓮ノ為吾ガ罪障消滅ナシ、今日ノ日ヨリ眞ノ妙法トナヘアレヨ」

「吾ハ、奇稲田姫。」

今朝ホド天津皇祖ノ御言ノ葉、吾レ変リ續キヲ申シ告ゲム。

日聖ハ大國主ノ変化ナリ。世界立直シノ重キ役目、アノ人ナラデハ出来ヌ事、神々ノ御選ビナサレシ人ナルゾ。古ヘヨリノ傳ヘ事ニハ大國主命ハ吾子トハナリ候ヘ共眞ノ吾子ナラズ、背君建速素戔鳴尊ノ御氣噴ノ狭霧ニテ出来申セシ子ナリ。妾ハ子ガ恵マレヌニヨリ妾ノ子トシテ育ミシゾ、我レ天降りテ手摩乳、脚摩乳ノ子トシテ生レ、姉君達ハ八岐大蛇ト

註釈

云フ悪者ニ攫ハレ、コノ亦吾モ攫ハレル時今ノ背ノ君建速素戔鳴尊ニ御助ケイタダキ、其ノ誼ニヨリ妹背ノ契ヲ結ビシゾ。ハジメ出雲ニ居タリシガ八岐大蛇吾レヲ諦メル事デキ申サズ、暇アル時ハキツイ執念ソレヲ避ケル為コノ大倭鷄杜ニ來リ、其處ニテ生涯ヲオクリシゾ。今ノ鷄杜ニアル磐境ハ吾ノ墳墓ナルゾカシ」

①「吾ハ、奇稲田姫」以下の発言について奇稲田姫が天津皇祖の言葉として語っている、ここでの発言の内容に対応する記事を、法主は「私の言っておきたいこと」という文章の中で書かれている。奇稲田姫のこの発言をより深く理解するためにも、参考のために引用しておこう。

《大倭として五十年、自分のお役目は何であつたかなと、今になって後を振り返って見てハツキリと分つてきておりますが、一番大きな問題は倭神宮の本当の霊地というものを、まず表に出すということが、私のこの世の中に生まれてきた第一条件なんです。

現在の大倭神宮の霊地は、昔、まあ昔といっても霊界では百七十二万年前とおっしゃるねんから、我々の頭ではちよつと想像できない年代になるんですけど、そのときからあそこにおられるのが奇稲田姫命さんなんです。まあ

百七十二万年前というのは、それは霊界の話やと思うんですけども、まだ我々のような人類が発生していない、それ以前の年代やと思うんです。そこに霊的な人格としての霊だけが昔から存在しておったと思うんです……。

それが大和の出雲、三輪山のそばの出雲ですね、あそこで奇稲田姫命としてこの世に生まれて、いろいろの事情のために自分の元の本地、心の故郷である大倭へもどつてこられた。そして人間としての奇稲田姫命さんは大倭神宮のあの土地で亡くなつておられるんです。大倭神宮が奇稲田姫命さんの終焉の地なんです。まあ島根の出雲では有名になつてますけれども、終焉の地は本当はここなんです。

それと須佐之緒命が婿さんですからね。須佐之緒命さんと奇稲田姫命さんが結婚されてうまれてきた方が、饒速日命なんです。

その饒速日命は、大倭神宮のあそこでお生まれになつておるんですね。大国主命とか大己貴命とか、そういうような仕事によつての別名はついていますが、本当のお生まれになつたときの名は饒速日命なんです。

そして何百年か何千年かたつた後の神武天皇の時代には、その人の子孫にあたる長曾根彦が大和の大王だったんです。(中略)

奇稲田姫命さんには八岐大蛇の伝説もありますけれども、何かの事情ですつと西のアジアの大陸から朝鮮をわたつて日本へきた須佐之緒命さんと一緒になつて、そして饒速日命さんがこの土地で生まれておるんですから、日本民族のご先祖さんというのは饒速日命なんです。

今まではこのことは全部抹殺されてますし、現在の日本人とすれば日本民族の祖先は伊勢神宮にお祀りしてある、伊勢が根本だというよう

になつておりますけれども、その誤りを私が言わなければならぬ宿命があるんです」

『ながそねの息吹』2091〜2093頁

②「背君建速素戔嗚尊ノ御氣噴ノ狹霧ニテ出来申セシナリ」

このような子産みに関する表現は『古事記』や『日本書紀』にも見られる。ここでは『日本書紀』の「素戔嗚尊と天照大神の誓約」の章の一部を現代語訳で紹介しよう。

《こういう次第で素戔嗚尊は、天照大神の、鬚・鬢や腕に巻き付けておられる八坂瓊の五百箇御統を求め取つて、天真名井にすすいで、がりがり噛み砕く、吹き棄てる息の狭霧で生んだ神を、名付けて正哉吾勝勝速日天忍穗耳尊と申す》(小学館『日本古典文学全集2日本書紀』65〜66頁)

現代語訳

同日、午後8時半

倭姫「ほの明るい夜明けすぐに、松の枝に夜明け方に鳴く鳥が一羽止まっています。カアと一声高い声で鳴き、私共の天皇の御齡をお祝い申し上げるのは芽出たいことです。この時に太陽神(宇宙神)が雲をかき分けて昇り、光をすべてに輝かし、本当に芽出たいことです。これは芽出たい物事の起こる前ぶれなのです。

天皇の住まわれる池の水際に丹頂鶴が飛び交い、太陽神の御言葉をお共の天皇に伝えます。

(※以下太陽神の御言葉) 大海原の岩の間に私は昇り、数多の波に光を映します。黄金に輝く波が押し寄せて(これは)私共、日本の前ぶれを示すものなのであるのです。題目」

実相・海辺の向こうに島が二つあり、その間から

宇宙神(太陽神)が姿をあらわされ、数多くの波にその御光を輝かし、雲は一面に茜色となる。波は黄金を散らした様にキラキラと光っている。七面大天女「私は七面大天女です。

無地名太郎重成、よく来られました。先程あなたの妻梅菊に話聞かせおいたこと、しっかりと聞きになりましたか。あなたは吾子である日蓮のために自分自身の罪障消滅を行い、今日の日から真の妙法を唱えるのですよ」

(※「無地名太郎重成」とは、本年の本紙9月号の「梅菊」に関する註釈で、日蓮の父「貫名重忠」と書かれている者と同一人物であろう)

奇稲田姫「私は奇稲田姫です。

今朝の宇宙神の御言葉を、私が(宇宙神に)代わつて続きを申し伝えます。

日聖は大国主の変化なのです。世界を立て直す重き役目は、あの人(日聖)にしか出来ないことで、神々の御選びになられた人なのです。昔からの伝えられた事には大国主命は私の子供とはなっていますが、本当の吾が子ではありません。私の夫である建速素戔嗚尊の吹かれる息の霧から出来た子供なのです。私は子供に恵まれなかったので私の子供として大切に養育育てたのです。私は霊界からやつてきて手摩乳、脚摩乳の子供として生まれ、姉達は八岐大蛇という悪者に攫(さら)われ、このまた私も攫われようとした時、今の私の夫である建速素戔嗚尊に助けて頂き、その縁により夫婦の契りを結んだのです。最初は(三輪の)出雲に住んでいましたが、八岐大蛇が私を諦める事が出来ずに、(こちらに)気の緩みのある時には強い執念(を受けるのです)。それを避けるために大倭鶏杜にやって来て、この場所にて生涯を送ったのです。現在の鶏杜にある神の鎮座される場所は私の墓のある土地なのです」

表紙写真に寄せて

無の発見

東京都葛飾区 堺 祥子

私は「書」のグループに所属しているが、いわゆる「書道」ではない。

三千数百年程前に中国の殷王朝で多量に発生した「甲骨・金文文字」を自分流の墨線で表現し、それを「古代文字アート」と称している。

文字を通して、いにしえ人の生活、社会の有り様、価値観、美意識が見えてくる。

当時の王は、日々様々なことを占い、民にそれを伝えるのが役割であった。そのために、記号としての文字が必要になった。

文字とは、いわば支配の道具として必要だったのだろう。彼らの天才的な創造性に驚愕するのみだ。

今回の私のテーマは「舞」と「無」である。元来「舞」の文字はなく、先に「無」があり、「舞」の意味も兼ねていた。

私が想像するに、明確な言葉や文字を持たない人々は、事あるごとに踊りながら群の意思を共有し、心を鼓舞し、そのうち次第に思考が失せ「無」になる瞬間を体感していたのだろう。つまり「無」は「舞」だったのだ。

時代がすすむにつれ、「無」がもつぱら、事象のあり、ナシを表す意味に使われるようになったので、新しい文字として「舞」が必要になったのであろう。

原始の巫女が、奉納の舞を踊るうちに、トランス状態、つまり無我へと移行している様子をみて「舞」を「無」と同じ文字として表現した。これは「無の発見」である。

仏教でいう「空」とは異なる身体感覚としての

「無我」の状態を舞のなかに見たのであろう。これは単なる象形を模した文字ではなく、人々が実際、身体状態として「無」を体験していたからこそだと思う。我々現代人には想像を遙かに超えた感覚だ。それを記号化したいにしろ人の想像性に驚くばかりである。

本紙3月号(令和6年通巻643号)で山極先生が「人がじっと木を観れば、木が人を観る」とおっしゃっているが、木と目から成る「相」という字は、正に人が樹木を観る行為、すなわち目の

呪力によって、木からさまざまな力を得る行為が普遍的であった事を表している。

木の前に佇んで木と交流する人々の姿が目につかんで来る。まさしく文字は、人の行為を記号化し、それは素晴らしく映像的であり、世界でも唯一無二の文化遺産である事を誇らしく思う。

補足

私が所属している古代文字アーティスト集団「天遊組」は、東京谷中の天王寺上善堂にて、月2回お稽古をさせて頂いており、年に一回秋に展覧会を開催して、もう20数年になります。また海外展ワークショップ等も、スペイン(バルセロナ)、フランス(トゥール)、サンフランシスコ(UCバークレー)、サンマテオカレッジ)、ベトナム(ハノイ大学、日越大学)等で実施してきました。

なお天王寺では体験も可能です。天遊組のホームページ <https://ten-you.net/> をご覧ください。ご参加をお待ちしております。太い筆にたっぷり墨を含ませ、床に広げた和紙に引くダイナミックな墨線の虜になる事、間違いなしです。

ミニユース

故井手泉さんの標本を博物館に寄贈

本紙『おおやまと』の表紙に動物や植物の鮮やかな写真を数多く提供してくださった井手泉さんが帰幽されてから、もう3年以上が過ぎました。井手さんは爬虫類や両生類、つまりヘビやカエル等の研究に打ち込んだ「ヘビ学者」でもありました。

井手さんの遺品を整理する中で見つかった爬虫類や両生類の標本が多数あり、去る10月27日に大阪市住吉区の長居公園の中にある大阪市自然史博物館にその一部を寄贈しました。同館の学芸員の方からは、大変役に立つ資料であるという言葉頂き、井手さんも安堵されているのではないかと感じ帰路につきました。(哲)

こだまこだま

どちらが賢明か

▼岡山市真庭市 湯浅芳郎

第1次世界大戦はあった。
第2次世界大戦もあった。
世界の現状では、第3次世界大戦もあるかもしれない。

第4次世界大戦はない。第3次世界大戦で人類が滅びるからである。

さて本紙9月号で紹介した「燕」と「人類」とではどちらが賢明だと思われましますか。

法主・言の葉



形から入って形からぬける。
意識して仲良くすることはつらいが、いつの間にか本当に仲良くなれる時がある。

あじさい日誌

10月12日 午後2時から大倭拝殿において大倭会主催の観会が行われました。この日は久しぶりに加納輝嗣さんが参加されました。この日のテーマは「かなしみ」がテーマでした。

10月14日 今年も金剛大龍王さんの寝床といわれる薫敷神事用の新しい薫が大倭殖産の辻本賢司さん、松永秀彦さんによって大倭大本宮拝殿の軒下に運ばれました。

10月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。この日奈良市の宮内章子さんが初めて参拝されました。

10月17日 岸和田市の寺田佳美さん、伊賀市の川淵皓平、育代夫妻とお子様の真流、花奈、麻紘さんたちが来邑されました。

日聖祭のご案内 令和7年12月23日(火)

大倭八十二年 一元旦

法主日聖師の御誕生を記念する祭典

○午後1時半、法主様の奥津城に参拝。

午後2時より大倭大本宮拝殿において日聖祭が執り行われます。

お願い 今になっても各種感染症の勢いは予断を許しません。引き続き、皆様のご協力をどうぞよろしくお願い致します。

10月19・20日 大倭会秋の1泊文化行事。四国崇徳上皇白峯寺御陵と今治タオル美術館、道後温泉・道後館(泊)を訪ねました。夜の宴会でめったに歌わない山崎正知さんもカラオケに登場し大いに盛り上がりしました。



道後温泉にて

19日 交流の家で「交流の家コンサート」が開催されました。今年もライブやトークで盛り上がり、2階では、中国のハンセン病快復者の村で活動していた原田僚太郎さんの彫刻展も同時開催。多くの人が参加しました。10月21日 北海道小樽市在住の本紙編集部員、守谷明宏さんが

来邑されました。

10月22日 午後6時半から交流の家で守谷さんを囲んで本紙『おおやまと』の編集部員や邑人と夕食会が行われました。

10月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。

この日は昭和41年10月23日の法話をお聴きしました。

10月24日 午後1時半から西宮市の青木利機さんとお母さんが邑にこられ、杉本順一さんと歓談されました。

10月29日 午後5時から教務本庁で本紙の編集会議が開かれました。引き続き11月9日の大倭会主催「文化講演会」の準備の話し合いが行われました。

11月2日 午前8時から大倭墓地の掃除が行われました。

11月5日 午後5時から本紙の編集会議が開かれ、続いて9日の大倭会文化講演会の準備の話し合いが行われました。

11月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

午後6時半より大倭会館で邑倭の会が開かれました。

大倭安宿苑では10月24日 午前10時半より新入職員研修会が行われました。今回は5名受講しました。

(菅原園) 10月20日 午後から「おひさまデパート」を開催。交流ホールはデパートのように衣料品

あんない

*金鶏祭(大倭神宮)

12月4日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

金鶏祭とは、高千穂勢に対し鳥見側が正に勝鬨(かちどき)をあげんとした時、天に出た光を天啓と悟り矛を収め講和した、「大和(だいわ)」の精神を記念するお祭りです。

『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曾根邑のすめらみこと」等を読んだり、聖歌「くにのもと」を歌う時、改めて「和の光」に思いを致しましょう。

*月次祭(大倭神宮)

12月6日(土) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催祝会

12月14日(日) 午前9時より「掃除みそぎ」として、大倭紫陽花邑境内の大掃除です。昼食は用意されます。

これに先立ち8時より大倭墓地の大掃除が行われます。

*月次祭(大倭神宮)

12月15日(月) 午後2時より大倭神宮にて。

*日聖祭(大倭大本宮拝殿)

12月23日(火) 大倭元旦。

上の「ご案内」をご覧下さい。

*大倭神宮境内・周辺大掃除

12月28日(日) 午前9時より。

有志の皆さんはご参加下さい。

昼食は用意されます。